所属欲求尺度 (the Need to Belong Scale) 邦訳版作成の試み

小林知博¹⁾ 谷口淳一²⁾ 木村昌紀³⁾ Leary, M. R.⁴⁾

(青山学院女子短期大学)¹⁾ (大阪国際大学人間科学部)²⁾ (大阪大学大学院人間科学研究科、日本学術振興会)³⁾ (Duke University)⁴⁾

Key words: 所属欲求, 邦訳版作成, 妥当性

問題

所属欲求 (the need to belong) とは Baumeister & Leary(1995) が提唱した概念で、「人は社会的な絆を形成し、社会的に受容されたいという基本的欲求を持つ」という所属仮説(belongingness hypothesis)に基づくものである。Baumeister & Leary(1995)によると、「所属」は快感情を生みだし、「別離」を経験、または想像するだけでも、私たちは様々な不快感情を経験する。そして所属欲求が満たされないと、攻撃行動や自滅的行動の増加、認知能力の低下など、様々な不適応症状が引き起こされるという(Twenge, Baumeister, Tice, & Stucke, 2001; Twenge, Catanese, & Baumeister, 2002; Baumeister, Twenge, & Nuss, 2002)。

Leary, Kelly, Cottrell, & Schreindorfer (under review)は、この所属欲求の個人差を測定する 10 項目からなる尺度を作成し、様々な類似概念との関連を報告している。所属欲求は特に親和欲求と概念的に類似しているが、親和欲求は「他者との相互作用を求める度合い」であるのに対し、所属欲求は「対人的な受容・所属に対する欲求」であるという点で概念的に異なる。また所属欲求は欲求の強さに関する個人差を測定するものであるため、現実に対人関係が希薄であるかどうかを測定する孤独感とは概念的に異なる。

本研究では、Leary et al. の Need to Belong Scale を邦訳し、Leary らの研究に準じて親和動機測定尺度、UCLA 孤独感尺度、Big Five 尺度、対人不安尺度、自尊心尺度を、また独自に公的・私的自意識尺度、社会的スキル(KISS18)尺度、自己呈示尺度、愛着尺度を測定し、本尺度邦訳版の基準関連妥当性を検討した。邦訳化にあたっては、バックトランスレーションの手続きを経て、米国の大学で在学経験のある社会心理学者 2 名が最終的なニュアンスのチェックを行った (Table 1 参照)。

調査1

調査参加者: 関西圏・首都圏の大学・短期大学生 177 名 (年齢 $M=18.49$, $SD=.79$, 男性 72, 女性 105 名)。

使用項目: (1) 所属欲求尺度邦訳版: 10 項目 ($M=3.20$,

$SD=.74$)、(2) Big Five 尺度 (和田, 1996): 25 項目、(3) 親和欲求尺度 (岡島, 1988): 4 因子 26 項目 (各因子は情緒的支持 (以下 EM)、ポジティブ刺激 (同 PO)、社会的比較 (同 SO)、社会的注目 (同 AT))、(4) 公的自意識・私的自意識 (菅原, 1984): それぞれ 11, 10 項目、(5) 対人不安尺度 (Fenigstein ら, 1975): 4 項目、(6) メール使用頻度、対人関係の広さ、他者と過ごす時間などを尋ねる 13 項目 (愛着尺度も測定したがここでは報告しない)。

結果と考察: 所属欲求尺度の信頼性は $r=.81$ と高かったため、合計して分析に用いた。Table 1 に示す通り、所属欲求尺度は、Big Five の外向性と低い正の相関、情緒不安定性と中程度の正の相関があった。Leary et al. (研究 3) でも相関はそれぞれ $r=.16$ ($p<.05$)、 $r=.41$ ($p<.01$) であり、北米人でも日本人でも概念間の関係は同等であることが示された。情緒不安定性については、Leary et al. は「他者に受容されたいという欲求が高い者は、相互作用相手に好かれ受容されているかを気にするため、ネガティブな感情を経験しやすい」と考察している。

親和動機との相関はいずれも中程度であり、これも Leary et al. をほぼ追従する結果である (Leary et al. では 3 サンプルで、EM, PO, SO, AT がそれぞれ $r=.38-.54$, $.35-.40$, $.37-.48$, $.40-.46$)。またこれは所属欲求と親和欲求が概念的に同一ではないことを支持する結果でもある。

公的自意識との相関は高く、所属欲求の高い者は、他者から見られている自分の姿を気にする傾向があることが分かる。これも他の尺度と同様、概念的妥当性の高さを示すものである。

調査2

調査参加者: 関西圏・首都圏の大学・短期大学生 170 名 (年齢 $M=18.38$, $SD=.64$, 男性 70, 女性 99 名)。調査1の参加者とは異なる。

使用項目: (1) 所属欲求尺度邦訳版: 10 項目 ($M=3.31$, $SD=.76$)、(2) UCLA 孤独感尺度 (諸井, 1991): 20 項目、(3) KISS18 (菊池, 1988): 18 項目、(4) 自尊感情尺度 (山本・松井・山成, 1982): 10 項目、(5) 自己呈示尺度 (小林・谷口, 2004): 9 因子のうち所属欲求と関連があると思われる 6 因子 (計 18 項目)、(6) メール使用頻度など調査1と同じ 13 項目。

結果と考察: 所属欲求尺度の信頼性は $r=.83$ と高かったため、合計して分析に用いた。Table 1 に示す通り、孤独感と自尊心に低い負の相関がみられた。Leary et al. では孤独感には相関が見られていないが ($r=.02$, $-.03$)、自尊心は $r=-.17$ であり、類似した結果となった。自己呈示尺度とは、配慮、癒し、楽しい、外見が中程度の正の相関を持ち、所属欲求の高い者は受容されたいために他者に映る自己の姿を気にすることが示された。また社会的スキルとの間には相関が見られなかった。その他、所属欲求の高い者は、携帯メモリに入っているアドレスの人数が多い ($r=.20$, $p<.05$)、日常生活を人と過ごしたいと思う度合い

が高い ($r=.21$, $p<.01$)、常にメールができる状態でない不安、メールの返信がない不安 (各々 $r=.31$, $.38$, $p<.001$) であり、外的妥当性が確認されたといえる。

所属欲求の高さは人々の情緒的・社会的生活に重要な影響を及ぼしていると考えられ、今後様々な側面からの検討が望まれる。(KOBAYASHI, Chihiro, TANIGUCHI, Jun ichi, KIMURA, Masanori, & Leary, Mark, R.) 予備調査の実施に際し、大阪大学大学院人間科学研究科の大坊雅夫先生にご協力をいただいた。深く感謝いたします。

Table 1. 所属欲求 (邦訳版) 尺度項目

- もし他の人が私を受け入れてくれそうになくても、気にしないようにしている。(R)
- 他の人に避けられたり拒まれたりしないように努めている。
- 他の人が気にかけてくれるかどうか、めったに心配しない。(R)
- 困ったときに頼れる人がいると常に感じていたい。
- 他の人に受け入れてもらいたい。
- 一人でいるのが好きではない。
- 長い間友人と離れていても気にならない。(R)
- 人とのつながりを強く求めている。
- 他の人の計画に自分が含まれていないと、とても気になる。
- 他の人に受け入れられていないと感じると、すぐに傷ついてしまう。

注: (R) は逆転項目。回答は「1: あてはまらない」～「5: かなりあてはまる」の 5 件法

Table 2. 所属欲求と他の尺度との相関

調査1	Big Five					親和動機				自意識		対人不安
	外向	情緒不安定	開放	誠実	調和	EM	PO	SO	AT	公的	私的	
NTB	.18*	.47***	.09	-.09	.04	.52***	.46***	.45***	.39***	.61***	.18*	.25**

調査2	自己呈示						
	孤独感	社会的スキル	自尊心	配慮	癒し	知的	威嚇 楽しい 外見
NTB	-.16*	-.04	-.16*	.30***	.40***	.10	-.20** .38*** .25**

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$